
哀玩人形

ちぐ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀玩人形

【Zコード】

Z0956A

【作者名】

ちぐ

【あらすじ】

病院の庭を歩いていた俺、塚松は、踊る少女を見つける。狭い狭い小窓から始まる恋と崩壊のお話。

第一話 崩壊開始

真つ暗な場所が内臓にのめり込む。

吐き気を催し頭痛は絶えず、全てが暗闇に沈んでく。

絶望と呼ぶにふさわしいこの場所を、逃げ出す術を見つけた時、自分は既に崩れていて、世界はやはり絶望だらう。

ぼーっと歩いていたら、可愛らしい少女の姿を見つけた。
くるりふわりと舞い踊り、軽やかなステップで無音の旋律を奏で
ている。

「なにしてんの？」

多分これが最初の言葉。

自分は徐々に壊れてゆき、崩壊は全てを癒していく……。

まだ春空が肌寒い頃。

俺はとある病院の庭に来ていた。

「なあ、なにしてんの？」

もう一度聞いてみた。しかし返事は無い。窓枠の中の彼女は無言で踊り続けるだけだ。

おかしいなあ……窓は開いてるから聞こえてるはずなんだけど……

…。

「おーい」

他人にしつこく問うのは失礼だろうかと思つたが、どうしても氣になる。

もう一度聞こうと思つた時、

「え、あたし…？」

必要以上の驚きは、旋律を止めてやつと俺に応えてくれた。

「あ、気付いた。うん、そうそう。アナタアナタ」

「…あなた…見えてたんですか…？」

「ああ、うん」

庭に隣接する民家の小窓の奥、…とても目立たない所に、彼女の姿はあつた。

窓は庭に面していたが、低い植木の陰になつていて、真面目に歩いていたら見落としそうな場所だ。多分俺みたいにぼうつとしていると見付けられないだろう。

「えつと…何つて…、見てわかりません…？」

言われてみればそうだ。見ればわかる。

「あー…いや…」

まずい…これじゃあただのナンパだ。いや最初からただのナンパなのか？

とりあえず応えてくれたんだ、何か言わないと…

「どうしてそんな所で踊つてんだろうと思つてさ。ここって庭の奥の方だからあんま人来ないから…もっと人に見える場所とかでやんないの？」

「え…人に…ですか…？ あたしにはこのスペースが精一杯です…」

彼女は肩を落とし、両手で窓枠を示して言った。

「うつわ狭つ…！ 謙虚…！」

「何で…？ 絶対色んな人に見てもうつたほうがいいって… 涙い綺麗だつたよ？」

「…………でも、自信無いです…………すみません…………。っていうか、えっと…………失礼なんんですけど、あなた…………誰ですか…………？」

この時の彼女は何も知らない。

俺の目がどんな風に彼女を映していたのかも、俺の精神が確実に崩壊していることも。

第一話 崩壊開始（後書き）

第一話、読んでくださってありがとうございます！！！
つたない文ですが、感想を頂けると嬉しいです（^ - ^）
ちなみにこれは学年末テスト真っ只中に書きました。。（笑）

第一話 小窓「じ」

「よ、バイオレット！」

「塚松君……？ こんなにわざ」

並木道が葉桜に染まる頃。

俺は毎週のように彼女の元を訪れるようになつて、いた。
前々から毎週土曜に入院している弟のお見舞いに来て、いたので、
ついでに彼女のダンスも見に来る」とこしたのだ。
会う場所はやはり病院の庭に面する小窓「じ」。

あー、いつ来ても狭いー

「なんだかすみません……毎週付き合わせてしまつて……」

「え！？ 謝ることないよ！？ 俺が好きで来てんだからや、そ
んな気にすんなつて！」

「でも……」

「いーいからーーからーー！ ホンシット俺毎週樂しいからさー……な

？

「そうですか……？」

「うん、そうやつ！ ほら、練習始めよー！」

「……はい！ ……あつがとう！」わざこます……！」

彼女は声を明るくして、大袈裟にぺこりと頭を下げる。

長い茶色の髪が床につきそうになる。

可愛いなあ。

「じゃあ、先週の曲でやりますね」

「はいはーい、しつかり見まーす」

控えめな音で、曲が始まった。キラキラして可愛いらしい曲。し

かしここか謎めいた調べ。

結構単調な曲ではあったが、俺は音に合わせて足の先でとんとん

とん、トリズムをとる所がなんだかとても気に入つて、数種類見せてもらつた物の中でもかなり好きな踊りだつた。

「」の踊りはまだ上手く出来ないらしく、最初に見た物よりずっと不格好にしか踊れていなかつたが、一生懸命さには魅力があつた。

というか、バイオレットは目が見えていらないらしい。

自分でははつきりと言わないが、会話中もちゃんと俺の目を見付けられずについつも変な方を向いているし、よく意味も無く窓枠につかるので、多分そくなのだろう。

それなのにこんな風に踊れるなんて……かなり凄い。

バイオレットは舞う。

「あつ」

旋律が止まる。足がもつれて転んでしまつた。

「大丈夫？」

「大丈夫です。すみません……。いつまでもやつちやいますね……先週も失敗したのに……」

突如弱くなる声。反省と悔しさが彼女を襲い、激しい自虐が刻まれそうになる。

「まーまー、すぐ出来るようになるつて！ 気長にいこー。それに、先週よりも大分上手くなつてる。そんな心配する事無いつて！」

「ホントですか……？」

「ホントホント！ なんかさ、あのーあれだ、よく祭とかで売つてるやつ……こんぺい糖？みたいだつた。あの『とんとんとん』つて所がさ」

「ホントですかー？」

突然彼女の声が明るくなつた。

こんなに大きな声が出せるとは思つていなかつたからか、かなり

びっくりした。

「う、うん、ホントだけど？」

「嬉しいです……！」

後で聞いたところ、あの曲は『こんぺい糖ナント力（なんだつたつけ？）』とか言つらしい。

しかしそんな事を全く知らない俺は、『こんぺい糖がそんな嬉しいもんなのか？』と不思議に思いながら再び舞い始めた彼女を見ていた。

「どう、人に見せるのには結構慣れた？」

『バイオレットを人目に慣らすこと』。それが俺の役目だった。全く、我ながら素晴らしい口実を思い付いたものだ。

「いえ、まだちょっと……やっぱり人が見てると思つと緊張してしまつて……。そこまでは技術が追い付いてないと思ひますし……すみま、……頑張ります！」

「そつか、頑張れ。まあ気長に行こ、な！」

痛いほど真面目で頑ななバイオレット。

少しずつ、自虐的な面を減らしてあげられればと思つた。なんだかそれが俺の役目のような気がした。

……いや、ただの自己満なんだけども……。

平和な休日は、小窓ごしに彼女を見る。

この狭い空間が、今の一人の全てだろう。

第一話 小窓(じまど)（後書き）

『「こんぺい糖ナントカ』って言つのは、よくバレンタインで使われる『こんぺい糖の踊り』（だと思つのですが；）の曲の事です。
2005年3月現在はFAXのCMにも使われてたりしますよ（
^-^）聞いたことがあるのでは？

第二話 アイス

夏がもうすぐそこまで迫っている頃。

今日も『こんぺい糖ナントカ』のダンスを見せてもらつた後、蒸し暑くじめじめする庭で棒アイスを食べていたら、バイオレットが今まで一度も訊かなかつた事を訊いてきた。

「塙松君……弟さんの調子は、どうですか……？」

アイスが垂れる。

「…………んあ？…………あー…………あいつ？なんかそんなに重大な病気つて訳じやなさそうなんだけど、うわっ、なかなか退院できないんだよなー。でも、まあ大丈夫大丈、つと、うん、大丈夫！バイオレットが心配する事じやないよ

「…………？…………？…………？」

バイオレットは俺が必死に下へ下へと向かおうとするアイスと格闘していることが分からなかつたらしく、怪訝に首を傾げられてしまつた。『ごめんごめん』と説明する。

「あはは、そうですか。…………弟さんが大丈夫そうでよかったです。塙松君春からずっと來てるから、弟さんも病氣が長引いてるのかな、と思つて……」

「んー…………あー…………そうだよなあ。考えてみたら、あいつが退院してたら俺病院に来てないもんな。あれ、でも、そうなると……」

弟が退院したら、…………会えなくなる？

「…………」

会えなくなる。

彼女は俺と同じようにそれを思つて沈黙してくれているのだろうか？

いや、違うかもしない。違うだろう。思い上がりだ。でも、どうしても現実だと思いたい気持ちは胸を熱くさせる。

「……ま、まあ、あいつが退院しても来れないわけじゃないしあー……」

だんだん自分が何を言つているのかが分からなくなってきた。ただ顔が熱く紅くなつてゆく事だけが分かる。

あーっ！！！なにやつてんだ俺ーっ！！

「……会いに 来てくれますか……？」

「え？」

「あ、いえ、違、じゃなくて、な、何でもないです……！」

彼女は慌てて両手をぶんぶん振りながら言つた。
うわ……っ

「……うん、会いに来るよ」

「……っ……あ……、ありがとひさいます……」

ぱとつ

「わーっー！」

今日の勝負はアイスの勝ちだ。

バイオレットに気を取られてしまつた、俺の負け。

今回は彼女も何が起つたのか分かつたらしく、くすくすと笑われてしまつた。

あーだから……、なんでそんなこ……

アイスが無くなつた棒が、手からはなれる。

思わず手を伸ばして、髪に触れる。

「可愛しなあ」

あれ、今俺何言った？

バイオレンシスは動かない。石のやつは固まつてしまつた。
うわあー やつちまつたよおーーーー ねかあー やーーんーー

「……手が」

「え？ 手！？ あ、じめっ！」

慌てて髪から手をはなす。

「わあそんなに駄目だな!! そんなにやはかだ!!

「一九三〇年、シナ舞一!!」

ナシパを超えてセクハラか！？

「そうじゃないんです！ ただ、手が、……塚松君の手が、

たんです……」

「？」

見えた?
手が?

「……じゃあ、こうすれば……俺の顔も見えるかな……」
「え？」

衝動を抑えるのには、まだまだ俺は若すぎた。
気が付いたら窓の奥まで手を伸ばして。
目を閉じて。

一瞬 触れた唇は、温かくはなく。

「……顔、が……」
「……見えた?」
「……はい……つ……」
「..」

触れさせて。触れば感じて見えるな。俺を見て。どうしても君が好きだから。

……痴漢つて呼ばれなくてよかつた……；

心配しないで。余えなくなる日は来ないから。
あいつが退院する日は、来ないから。
でも、この時の俺には、それさえもわからず……。

帰り道。

看護師の哀れむ囁きは、俺の耳には聞こえない。

アイスは溶けて、原型はもうわからない。

第三話 アイス（後書き）

なんか凄いですねー、塚松君。積極的ーーー！てか暴走気味ーーー（笑）
それにもしても、男の子目線が上手く書けているか心配です；
塚松の喋りやモノローグがキモかつたらすみません（＾＾；）

蝉の音がどこまでも響きわたりそうな頃。

夏の気温は、涼しげに思える病院であつてもやはり暑くて、さすがに日差しの下に長時間居るのは辛かつたが、それでも俺はまだバイオレットの所に通つていた。

悲しくもあれから俺達の関係にあまり大きな変化は無く、ダンスを見てからくだらない話をすると言う単調なスタンスがいまだ続けられ、とうとう第一回期末テストの時期が来てしまった。

「『じめん、バイオレット！　来週からまたテスト週間にに入るから、来週・再来週と来れなさそうなんだ。悪いな』

「え？　塚松君も来週からなんですか？　あたしも来週からテスト週間なんです。偶然ですね、中間の時も同じ時期でしたよね……？」

「あー、そういえばそつだつたな。そういえばさ、バイオレットはどここの高校に通つてんの？」

実は、俺はこれまでバイオレットがどここの学校に通つているのかを知らなかつた。

ひとつ下の学年……今年高校1年になるという事は大分前に聞いたのだが、その頃季節はやつと入試の合格発表が終わるくらいだったので、なんだか聞き辛かつたのだ。

「あれ、言つてませんでしたか……？」　東条高校です

「東条！？」　俺もだよ！？」

「ええ！？」　じゃあテストって……11日ですか？」

「うん、そうそう！　バイオレットも東条だつたのか！」

この地域では『まあまあな方』と、とても微妙な評価をされてい
る市立東条高校。

自分は第1志望で入ってきたが、バイオレットはそうではないと
いう可能性は否定できないような所だ。あの時聞かなくて正解だつ
たかもな。

「階が違うだけなのに会わないもんなんだな。全校集会の時とか
に見てもよさそうなのに……」

「そうですね……。あ、でも、会つても塙松くんには分からない
かもしれませんね」

「え？ なにが？」

「あ、あたしの事です。塙松君はあたしの声しか知らないから、
すれ違つても分からなくないですか……？」

「声しか知らない？ 僕が？ バイオレットの？」

「？」

「ええ？ ち、違いますか……？」

「俺にはちゃんとバイオレットの顔が見えてるよ？」

「自分は目が見えないから、俺にも自分の顔が見えていないと思
い込んでるんだろうか？」

「ええ！？ 見えてる！？ どこからですか！？」

「焦りながら変な所をきょろきょろとまわすバイオレット。

おいおい……

動きがおかしいが、そんな姿も可愛らしく思えてしまつ。
自分の顔の筋肉が自然と緩んでゆくのが分かる。

「それより、バイオレットの方が俺を探しにくいんじゃない？」

「自分自身こそ、俺の事は、声と、手と、……唇の、感触しか知ら
ないのだから。

「うわあ恥ずかし！ こんな事絶対言えん！」

「そうですね……顔は一度しか見てないから……いえ、でも大丈
夫です！ 多分、分かります……！」

「遠回しにもう一度キスをするのを避けられたと思つのは氣のせい
でしようか。うん、気のせい……で、あつて欲しい。」

「あれだけで分かるんだ？ バイオレットは凄いなあ～」

「い、いえ、そんな……だつて……」

「？ うわつ！」

『だつて』。その続きは、たつた今出現した蚊と戦い始めた俺には予想できなかつた。

だつて、好きな人だから、見つけられないわけがないじゃな

い

……撃退完了。今日は俺の勝ちだ。

「ふう。な、バイオレット、じゃあさ、今度学校で会わない？」

別に軽い気持ちだつた。軽い言葉のはずだつた、が……

「え……」

突然彼女の声が囁く。

え……？

「え、あ、いや、嫌だつたらいいよ？」

「……『じめんなさい、…………すみません……』

ショックだつた。でも、会つのを断られた事以上にショックな事があつた。

久しぶりに聞く、彼女の『すみません』。

そんな事言わせて『じめん』と言いたいけれど、言つたらまた謝罪の言葉を聞かされそつたから、やつぱりやめた。

ねえ、『『じめんなさい』の後の『すみません』は、一体なにに謝つてるの？

どうしたら救えるの？

小窓の外から出来る事は、あまりにも少なくて……。

「……」「あ……、まあ、や、気にすんなってーいつもここで飲ってるからわざわざ学校で会う事もないもんな、『めん！ それよりヤ、……』

突然の、不安

つい先程まで通っている学校さえも知らなかつた俺は、はたして彼女の何を知つているのだろう？

やつぱり、一度だけでいい、少しだけでいい。学校の、普段の彼女を見たいと思つた。

そうすれば、何が彼女を苦しめるのか、分かるような気がしたから。

でもやつぱり、

『ネエ、ドウシテ会イタイツテ言シテクレナイノ？』

これが一番聞きたかったのかもしれない……。

崩壊は激しそぎて、違和感をも殺してしまう。

俺が崩壊に気が付くのは、もつ少し後の事。

『キミは見えてない? キミはみえてない。』

キミは見えてない? キミはみえてた。

see?

第四話 see (後書き)

長かったです！…本当は2～4話までがもつと短くひとつの大塊になるはずだったのですが、ここまで長くなってしまいました。
^何と言つか、グダグダですねえ・すみません；

月曜の活気と、休み明けの少し気だるい雰囲気がたちこめる頃。

俺は運動場のベンチに一人で座っていた。

……もちろん、バイオレットを探すために。

卷之三

「ふわー、なんだよお前にいでーよ!! 声で!! よ!!」

龍かは彼女を探そんと思つてゐたのは予想外の襲撃があつた

が多いらしい。

俺を叩く音とこいつの声は相当大きかつたらしく、少しづつ集まつてきていた生徒から注目を浴びてしまった。

「何だよー別にいいだろー？」スキンシップさ！」

いらん！ 悪いけど今俺人探してんの！ 邪魔すんな！！

まーあ塙松兄^つたら、冷たいわね^つ！」

..... #用レヌゼ.....」

バイオレットは見つからない。

「で、お前、誰探してんの？」

「誰つて」

たらぬ。まだ来てないのかな……。

「あ！ わかつた！ 女だろ？ 片想いだろつ！」

「な!? なんで分かるんだよ!?」

思わず奴の方へ余所見をしてしまった。

「何、図星？」

しまつた……

「……そりだよ……」

「な、なんだあー好きな娘居たんなら俺に言えよー！」

「なんで言わなきやなんないんだよ……大体、お前に言つたら言
いふらされそ уд аши」

「酷ー！ うつわひつどー！ 塚松兄酷いー！ このオレがそん
なに口が軽いと思うかい！？ この優しいオレが！！」

「あーはいはいはいはい！ 悪かつたよ冗談だつて！ 頼むから
静かにしててくれよ！ 僕は集中したいの！」

「あはは、すまんすまーん」

くそーにこにこ笑いやがつて……何がそんなに嬉しいんだよ……。

「つーかさ、待ち合わせじゃねえの？ 探すんだ？」

「あー……うん。ちょっと様子見たいだけだからさ……」

靴箱がある方から人の群れが出てくる。

「ふーん？ で、どんな娘なんだよ？ モテモテ塚松兄はどう
うのが好みなの？」

「モテモテつて……」

女子、男子、女子女子女子……うなあー

「事実だろー？ 塚松クンはカオがいいからなつー！ この前もあ
の娘にさー、」

「ちよつ、やめろつてー！ 指差すなー！」

「はいはーい。ははつ

けらけらと笑う。

「全く……あの娘は……凄い良い娘だよ。素直でさ……でも
すつごい控えめ。」

「へえー。大人しい娘が好みなんだ？」

「どうなんだろうな……」

大人しい娘が好みと言つよりは、ただ彼女を可愛いと思つだけな気がする。

いや、口には出せません。

「ふーん？ で、見た目は？」

「見た目？ なんでそんな事までお前に言わなきゃなんないんだよー……」

男子、男子、女子……違うな……うわ、やっぱ目が合つた！

「鈍いなー。優しいオレはキミの想い人を探すのを手伝つてやるうと思つてんだよ、塚松クン。髪型とか何かあんだろー？」

「……」

「なんだよ？ 文句あんのかよ？」

「ふ、……いや、無い無い。そうだな……茶髪で、そう、見た事ないくらい長い髪で……」

「じゃあとりあえず茶髪ロングの子を探せばいいんだな！ わかった！ 僕が見つけてしんぜよう…… ビーーーだー？」

今日の敵は急遽味方に変わつたらし。

髪が長く、茶色の娘を見つけては『あれは？ あれは？』と言つてくる。

常にふざけてるけど、結構良い奴なんだよなあ。

「はあーあ、結局見付かんなかったなあー。つーかせ、お前クラスくらい聞いとけよ！ 1年の茶髪ロングだけじゃ情報少なすぎー。予鈴も鳴り終わり、いよいよ集会が始まる時間になつてしまつた。そろそろやめにしないと教師に怒られそうだ。

「『めん』めん、でもおかしいなあー、絶対見つかると思つたん

だけど……わつ、すみません！」

すれ違った女子とぶつかってしまった。この人は茶髪だけど、シヨートだし先輩っぽいし……違つた。

「お前なー、好きな奴も見つけられないのは重傷だぞー？ もつと神経磨きなさいー！」

「はいはい……つと、『めんね。』

この子は黒髪おさげかー……眼鏡かけてるし明らかに違つた。はー、なんで見付かんないかな。

「お前ぶつかりすぎ。何人目だよー？」

「……五人目？ ……やっぱさ、俺達だけじゃ駄目なのかもなー。浩介が居たらもつと早くに見つけられそうなのに……あいつ、はやく退院しないかなー……」

「お前……」

「え？ 何？」

「いや……ほら、速く行いがちー……遅刻もしてないのに担任に殴られたら最悪だーっ」

「うわっそうだー！ ちよつ、待てよ置いてくくなつーーー！」

しかし、その後も俺は彼女の姿を見付けることができなかつた。

次の週も、次の週も。

どうして見付からないんだ……だんだん焦つてくる。

もしかして登校拒否なんじゃないかとあいつは言つたが、本当に

やつなんだりつつか？

だから学校で余裕ひと無いたり困ったのか？

速く、速く土曜日になれ。

早く会いたい。

すぐに会いたい・・・・・

「塚松兄さ、そんなにその娘の事好きなんだなー。オレはわ、
……いつもお前の頭の中は、塚松弟の事でいっぱいなのかと思つて
た。」

「浩介ーー？ なんであこつて事ばかり考えてなきゃなんない
んだよ？」

「……双子だしさー……」

「お前なー、どひこつ理由だよ……」

「……」

「なんだよ？」

「……いや、お前……変わったみたいで、戻かつたよ。」

「はあ？ お前……」

「何や？」

「やっぱキモい……」

「なにいーつ！？ この親切な俺にキモいとは何事だーつー！」

友人は良い奴で。いつも俺の事を慰めてくれて。

でも、ごめん。俺にはそれだけじゃ、足りなかつたみたいだ。

第五話 塚松（後書き）

今回は塚松と友人君の会話が書いていてかなり楽しかったです。友人君テンション高いですね！（笑）＜br＞さて、お話はそろそろ本題に入っていくと思います。＜br＞暗くなるので、次から後書きは無いかもしません～；；

第六話 愛しい君は・・・

土曜日。

いつもなら、ダンスを見終わってくだらない話をしているはずの頃。
俺とバイオレットは黙つたままでいた。

「……」

やつと会えたのに、なにを話せば良いのか分からぬ。くだらない話題も今日は出でこない。何故だかバイオレットも話し掛けでこない。

『学校に居なかつたでしょ？ 見付けられなかつたんだけ』
訊きたい。でも、そんな事を言つたら探していいた事がばれてしまひ。

どうすればいいんだ……。

「……やつぱり……、塚松君はあたしのこと、見つけられませんでしたね……」

「え……？」

「」の前の月曜日もその前の月曜日も、もつ一週間前の月曜日も
、お友達と運動場のベンチに座つてましたよね……？ あたし、
見てたんですね

「え！？」

見てた……？

「やつぱり、気が付いてなかつたんですね……。実は、ぶつかつ

たつも、してて……」

「……」

『うして？ あんなに探したのに。あんなに会いたいと願つたの
に。どうして見付けられなかつたんだ？』

だつて、バイオレットは居なかつたぢやないか。バイオレットは

……

「塚松君……」

「……あ……」

田の前には、小窓の奥には、いつも通りバイオレットが居た。
長い茶色の髪は今日も綺麗で、顔は、やつぱりおかしな方向を向
いていて……

『見てた』？

バイオレットは田が見えないんぢやないのか？

バイオレットは、バイオレットは……？

彼女は一度も自分は田が見えないなんて言つてない……
でも、俺の事は一度しか見てないつて。そつ言つたぢやないか。

なんなんだ？ 『見る』つて？

『うして？ 俺には、田の前のバイオレットが見える。なのに、

外ではバイオレットを見付けられない。

『塙松君は、あたしの声しか知らないから……』

「塙松君……、あたし……聞いたんです……」

混乱する俺に追い討ちをかけるように、彼女は言葉を放つ。
今日の彼女の声色は少しおかしかった。
怒つてるとか、そつ言つのじゃなくて……だけど、なにか……違
和感があった。

「弟さんの、事……」

弟？ 浩介？ 浩介の事？

「浩介……？ あいつなら、今日も見舞つて来たけど、別に……

「……、……」

？ どうかしたんだろうか？

浩介は、ずっと入院してゐるけど結構元氣で。ほら、だつて、それ
きもあいつの病室で……

病室で……？

「 浩介、は 」

「 」

頭がおかしくなりそうだった。

毎週土曜、俺は、浩介のお見舞いに来るために病院に来ていて。そう、バイオレットに会いに来るのも、そのついで、で……

『ほら、あの子……可哀相ね、また来てるわ……。あの日から、あそこへ通ってるみたいなんだけど……』

あの日……あそこ？ 小窓……最初に来た日も、俺はお見舞いの帰りで……。

違つ。

あの日は

……

「 つーーー 」

「つ、塚松君！？ 大丈夫ですか！？ あ、あたし……つ

「バイオレット……！」

気が付いたら、彼女の手を引いて、庭を抜け出していた。

彼女が小窓を越える時、声が聞こえたような気がしたけど……そんなもの、俺には聞こえなくて。

愛しい君は、今俺の手の中。

第七話 violet

気が付いたら、俺は自分の家の近くに居た。
病院からここまで歩いて来てしまつたらしい。

バイオレットは何も言わずに、俺の手についてくれていた。

真つ暗な場所が、現実が腹をえぐつて、内臓にのめり込むような
感覚がした。

胸が詰まる。苦しい……！

「ごめん……、バイオ、レット……」

「……」

青空が見えた。必死に声を振り絞つた。

「……俺……ずっと、あいつの、弟の見舞いになんか……行つて
なかつたんだ……」

「……」

夏の太陽は肌を焼き、頭脳をも引き起しそうになる。
「自分で、ずっと、行つてゐつもりになつてた、だけ、で……」

「……」

吐き気がした。頭痛もして、ふらふらした。
患者の全てが、暗闇に沈んでゆく気がした。

「ホントは……、浩介は……、バイオレットに初めて会つた

田口……

「……」

「……」

つけとめられなかつた。
言つてる今も、現実感が湧かない。

確かめるために、家まで歩く。

「バイオレットは、……それを、聞いたんだ……？」

「……」

「……バイオレット……？」

見てみると、バイオレットはともべつたつしていった。

「バイオレットー？」

しかし、彼女は答えない。

体制を変えようと思い、手を放す。

かしゃんっ

「バイオレットー」

「……」

「バイオレット、バイ……」
抱き上げても応えは無い。

「……塚松君！」

誰かに呼ばれた。

振り向くと、黒髪をおさげに結った、眼鏡をかけている少女が立っていた。

息を切らし、肩を揺らし、汗だくで俺の方を見ている。まるでやつと見付けたとでも言つよ。

「誰……？」

「……っ！」

「 なあ、バイオレットが動かないんだ……！ 病院……そつ、救急車！ 呼んで……！」

「 塚松君……つ……！ バイオレットを、よく、見て……！」

バイオレットは、……つ

少女はなぜか泣き出しそうな声で俺に訴える。

俺は、彼女の言つ通りにバイオレットを見てみた。

俺に抱かれたバイオレットの体は、地面へと向いている糸に従うよつこだらりと垂れ、全くとして動かない。

50センチしかない体は、バイオレットのもの。

「 ……バイオレットは……人形だよ……」

泣き出しそうな少女が言つた。

バイオレットはマリオネットだった。

手を離せば、『かしゃん』と音をたて、墜ちるモノ。
強い力で引いた糸は、無惨にもひきちぎられ……。

彼女が崩壊を確信した頃。

俺はまだ、なにも分かつてなくて。

ただ、いつかの棒アイスを思い出していた。

原型はもう、分からぬ……？

第八話 哀玩人形

「……バイオレットは、人形……？」

「君は、誰……？」

「あたしは……あたしは、董、です……」

「そう……。スミレ……」

董はなぜかとても哀しそうな顔をしていた。声には全く力が無かつた。

彼女の手には、バイオレットのものと思われる、人形を操るための取っ手のような物があった。

でも、そんな事はどうでもよくて。

「人形……？ 驚いた……違う……！ バイオレットは、バイオレットは……つ」

触れた髪は？ 唇は？

可愛いと、愛しいと思ったのは、やっぱり腕の中にはいる彼女。頬を撫でる。冷たい、人形の感触。それでも、やっぱり……

「……つ」

涙が出た。

崩壊でこまかしてた涙が。

崩壊を愛おしいと思つ涙が。

人形でも構わない。

やつぱりバイオレットが好きで、好きで……。

きつく抱きしめると、バイオレットの体はぎしぎしと変な音を立てた。

漠然と、分かったことがある。

俺は絶望に襲われて。

壊れた俺は、狭い、狭い小窓の奥に踊る人形を見つけて。

人形は俺の逃げ場所になつた。

彼女を好きでいる事で、俺は現実を忘れ、癒されていた。

でも結局、

自分はさらに崩れてしまつて、絶望にはなんの変化も無かつた。

ただ、いつの間にか、本当に彼女が愛しくて愛しくてたまらなくなつていで……

哀しい気持ちは、愛しく玩ばれる人形を作つてしまつた。

哀玩人形

せっぱり、そうだつたんだ。

頃。

月曜の活気と、休み明けの少し氣だるい雰囲気がたちこめる

あたしは運動場の端に居た。

「……はあ……」

ため息が出た。

この前の土曜。せっかく塚松君が会わないと云つてくれたのに、嫌がつて断つてしまつた。

失礼だつたよね……。

塚松君に会うのが、嫌だつたわけじゃないの。

ただ……

「つーかーまーううあにーつ……」

ぱこーん

ええ！？ びっくりした！！ 漆い声！！ 漆い音！！ 痛そつ
！！

つていうか……『つかまつあに』って……え、もしかして、塙松
君の事……？

声がした方を見てみると、そこにはやつぱり塙松君の姿があった。
うわつ！！ 何で居るの！？ 学校で初めて見た！！ 目開けて
るのも初めて見た！！

うわああ～なんか恥ずかし～……

つていうか何できょろきょろしてゐるお～！？ 誰か探してゐるの
かな？

嫌ー！！ こっちは見ないで！！

はつ！！ まさか探してゐるのつて、あたし！？ 違う違つ！！

勘違いもいいかげんにしろつ！！

あーあ……それにしてもやつぱり……

「おはよ、董！」

「あつ、おはよう」

自分の思考の波に乗りまくっていたら、数少ない友人の一人が話
しかけてきた。

彼女の綺麗に整えてある髪は少し茶色に染まつていて、胸のあた
りまで伸びている。

今時の娘つて感じで凄く可愛い。

「董やー、」

ああ～つあんまり大きい声であたしの名前呼ばないでーつ……な
んてこんなあたしだけに都合のいいお願ひしちゃだめだよね……つ
ていうか、塙松君はあたしの本名知らないから関係無いか……でも
バイオレットの和訳だし……すぐバレそり……。

「？ 何やつてんの？ わつきからおひおひしがやつて……そ、

私が話しかける前もなんか様子がおかしかった……つていうか、怪しかったよ?」「

「嘘つ！？ え、態度に出てた？ ええーーー！」

「ホント。気を付けなよ？」

「うん……。教えてくれて、ありがとう……」

はあ……だからあたしは駄目なんだ……。

不器用で、無配慮で……気を付けなきや。

「てかさ、董、さつきあのセンパイの事見てたでしょ?」

卷之六

たかひ
塙センバ

「……つていうか、何で知つてるの！？」

何で、
めでたす見てたじやん

あ、あの話の事

「はあ？ 知らないわけ無いじゃん！ 有名だよー？」あのセン

1

テテ！
何で！

「やつぱり知らないんだー……ホントあなたはそういう話に疎一
一なー。呪いがどうした？ あの御祭りが！？ 出ではーのナメー

じゃん！！

「ああ、そつかあ……そなんだ……あはは、そりやそうだよね。
ホント、格好良いいよねー

塙松君は本当に格好良かつた。

顔は同じ世界の住人じゃないんじやないかと思うほど整つていて、

足が長くて育はそこそこあるし 何より清潔感がある

彼が「ハナスレ、口』は『口をする時、間近で見てしまふが、自分
が犯罪者みたいに思えるくらい素敵な人で。

「……あたしなんかには、全然釣り合わないよね……」

「董？」

「あはは、『めん……』

会えない。

ただでさえあたしは不細工で。眼鏡で黒髪で。あたしの顔を見たら、きっと彼は……。

あたしの部屋には、小窓がある。

隣の病院の庭に面していて、田舎たりはそんなに悪くない方角だけど、下の方にあるから草に遮られてあんまり光は入っこない。

普段はベットの影に隠れて、全く窓としての機能を果たしていい、小さなスペース。

でもそこは、あたしにとつては小さな劇場で……。

ただ、昔なんとか会の『JINGO』が何かで当てただけの、可愛らしい茶色い髪の操り人形。

バレエの習い事がどうしても上手く出来なくて、とうとうやめた時にやつぱり名残惜しくてこの子を躍らせてみた。

やつぱりこれも上手く出来なかつたけど、時々生きてるみたいに動くのが嬉しくて頑張つて練習した。

親に見られると『もう受験生でしょ？ 勉強しなさい！』と怒られるので、ある時からベットと窓の間で密かにやることにした。あんまり人も来ないみたいだし、大丈夫だよね……。

ベットの上に座つて、手を動かして人形を舞わせる。

『なにしてんの?』

あー……人の声がする……。

でもこんなのに気が付くわけないよね。違つ違う。

『なあ、なにしてんの?』

……ああ、つと、よかつたひつかかんなかつた……

『おーい』

……

『え、あたし!?』

初めてだつた。初めて人形の踊りを褒めてくれて。もっと人に見てもらつた方が良いと言つてくれた。

窓の外に座つた彼。ベットの上からは、顔が見えないや……

『そつちの名前は?』

『名前、ですか……名前は……』

そつちの……つて言つんだから、人形の名前でもいいよね……

『バイオレットです……』

バイオレット。

あれから塙松君は、『可愛い』つて言つてくれたり、『また会いに来る』つて言つてくれたりした。

だから、あたしの事を嫌いじゃ、ないと……思つ。

でも、彼はあたしの顔を見ていないわけで。

一度『バイオレット』にキスをしてくれた時に窓を越えて来て見えた彼の顔は、恐ろしいほど整つていて。

彼はこの前あたしの顔が見えていると言つたけど、嘘だ。ベットの上のあたしの顔が見えるはずない。現にさつきから何度もあたしの方を見てるけど、何の反応も起じれない。

やつぱり……会えないよ……

「董！ 話はまだ終わっていないんだけど？」

「え？ あ、ああ、」めん

「あー……まあいいわ、あんた最近は減つてきたもんね」

「
？」

「で。あのね、あのセンパイが有名なのはね、もう一つ理由が

あるの「

「...え?」

「塚松兄弟って言つて、あのセンパイ、双子だつたんだよね」

双子

双子 ああ、だから『家公兄』って呼ばれて、七ひぎーへえ
双子 ええ、

—

「そうなのよ。あの顔が一人よ？ 物凄いよね」

卷之二

物語り

「あ、入院してるんだよね

「はあ？ 違うよ。何言つてんの？」

え……、違つの……？」

最後まで聴きなさい……兼さんはね、春に

11

「え？」

「あそこに居る塚松センパイ……お兄さんの方は毎週お見舞いに行つてたらしいよ。そういうのもあってか、なんかさらには有名にな

つちやつたみたいで……」「

「嘘、でしょ……？」

「可愛そうな話だけど、嘘じや……なによ。」「

嘘……つそ……！」

だつて、塚松君、いつもお見舞いのついでにあたしの所に来るつて……

「……塚松君……！」

「ちよつと、董！？」

行かなきや……塚松君の所へ。

でも、あれれ……ふらふらして、上手く、歩けない……

「ちよつと、董！……どうしたの、大丈夫！？」

あ……いつに向かって来る……？

「はあ～あ、結局見付かんなかつたなあ～。つーかむ、お前クラ
スくらい聞いてけよ！……1年の茶髪ロングだけじゃ情報少なすぎー！」

え？

そこから先の会話は、もうあたしの耳には入つてこなくて。

ドンッ

「……つと、ごめんね。」

あ

「お前ぶつかりすぎ。何人目だよー？」
「……五人目？……やつぱさ、……」

「董……？ 顔色悪いよ？ 大丈夫？」
「あ……う……うん……」

なぜか、あたしは思つてしまつた。分かつてしまつた。

塚松君が探していたのは、『バイオレット』なんじやないか、つ
て。

彼の精神は、もしかしたら崩壊しているのかも知れない……つて。

彼の心は崩れていた。

ずっとずっと、弟さんが生きていると勘違いしていく。

塚松君が探していたのは、可愛いと、会いたいと言つたのは、バイオレット』……人形の事だった。

声を聞いても分からぬなんて、相当、重症。

泣いてる彼を見た。

泣いてる自分が居た。

……ひついたら、彼を助けられるのか。考えなきや。

第十話　哀嬉回想

「来て……」

夕空がまだ明るい頃。

俺は董を連れて、再び家へと歩き出していた。

董は「はい……」と一言だけ言ひて、俺の後をしつかりと着いて来てくれている。

バイオレットの持ち主。バイオレットを操っていた人。それが董だと言う事は、この時の俺はもう理解できていた。でも、彼女にはなんの感情も湧かなかつた。

腕の中にはバイオレット。

現実を見に行くために、俺は歩く。また零れ落ちそうな涙を抑え
て、前を見て。

一人は怖い……だから、董に着いて来てもらつた。

バイオレットは動かない。

「董、少し……話していい……？」

「…………はい…………」

家まで、もうすぐ。

苦しい。

「浩介はさ…………本当に駄目な奴で…………双子なのに俺よりずっと纖細で、すぐに行くこんで、部屋は汚くて…………でも、…………俺なんかよりずっと良い奴で…………器用で、気遣いもちゃんとできてきて…………憧れ、だつたんだ」

「…………はい…………」

「あいつが入院したのは、去年の冬だつたかな…………。メールしてるとと思つたら、突然、息苦しいとか言い出して…………」

「…………」

「入院したばかりの時は凄くてさ、毎日毎日、なん人の女子が見舞いに来た事か…………。あいつ、人が来るたびに疲れてたのに、ちゃんと全員に『ありがとう』って言つてさ…………。偉いなあつて…………思つたんだ」

「はい…………」

家の門が見えた。

吐き気が酷かつた。嘔吐感の変わりに、言葉が出てくる。止められない。言い続けないと、叫んでしまいそつで。

「でも、あいつ、日に日に発作の回数が多くなつてつて…………医者には、ストレスだ…………つて、言われたらしいんだ。だから、俺、皆にもうあんまり来るなつて言つたんだ。やっぱり、人が来るとストレスも溜まると思って…………。俺も週に1回だけ、行くことにしたん

だ。皆よく分かつてくれて、それから来る人も大分減つて、発作の回数もだんだん減つてつたんだ」

「はい……」

「でも、誕生日、……沢山の女子があいにプレゼントを渡したがつて……だから、あいつ……みんなを呼んでつて言つたんだ。だから、皆を、あいつの所に連れてつて……」

「はい……」

「あいつは、凄く喜んで……また、皆や、俺に、『ありがとな』つて。それから、……それから、……、……」

きい……つ

「……董……来てくれる……？」

「はい……」

ありがとうと笑つて言つて、ポケットの中から鍵を出す。家の扉が、開かれた。

「……」

玄関を抜けて、真直ぐ2階に上がる。

短い廊下の突き当たり。右は俺の部屋。左は、……あいつの部屋。

ドアノブを握る手が、熱くて震える。

「それから……その、次の日……」

「……あ……」

「あの日……あいつは……また、発作を起こして……」

手に力が入らない。どちらに引けばいいのかわからない。

「その日が……『バイオレット』に会った日、ですか……？」

「…………うん…………」

バイオレットを抱いている事をしつかり心において、

俺はドアを開けた。

なんの変哲も無い、普通の部屋だった。窓があつて、机があつて、ベットがあつて。

でも、やつぱり違つた。

あいつの部屋が、こんなに片付いてたこと、あつたか？

整然と並べられた教科書、ノート。いつもは床に散らばっていて。かばんは一つも落ちていない。いつもはそこらじゅうにほかりっぱなしで。

プリンントで生めぬくされていたはずの机には、小さな花が飾つてあつた。

「塙松君……っ」

声が聞こえた時には、俺はバイオレットを抱いたまま床に崩れ落ちていた。

世話の焼ける奴が居ない。
憧れが居ない。

片割れは居ない。

やっぱり、死んだんだ。浩介は、あの日。

あの日を思い出していた。

病院に着いた時、あいつはもう動いてなくて。
触れてみると、人形みたいにつめたくて。
死んだ浩介を見て、哀しかつたんだ。

生きてる人形を見付けて、嬉しかつたんだ。

「バイオレット……踊ってくれる……？」

第十一話　・あたしの崩壊・

「たた、たんたん、たんたん、たたたん、たたたん、たた……」

静かな廊下。響くのは彼女の唄声。

座つたまま、壁に寄りかかってバイオレットを見る。

なんとか繋いだ糸は、思ったよりも上手く動いてくれている。

「こんぺい糖……」

バイオレットは前よりもずっと上手に踊っていた。
いつも足が糸に絡まって倒れていた所も、もう失敗しない。

そういうえば、彼女が唄うのを聞くのは初めてだ。

「すうすう」と自分が微笑んでいるのが分かる。

優しい唄声。

哀しい唄声。

「たん……。終わりです……」

「……上手くなつたね。頑張つて練習したもんな……」

「……」

きしむ音。

奏でられるのは無音の旋律。
最初に見た、あのリズム。

「あたしは……自分に自信が無くて……」

「……？」

「いつも、怖くて……なかなか出来ないあたしを、否定されるのが、辛くて……。そんな自分自身が嫌で、嫌で……いつも、誇れない自分に謝つて……」

「不器用で、無配慮で……友達も少なくて……だから、自分で自分を、戒めるようになつて……何も、主張が、出来なくなつて……人とも、顔を合わせるのが怖くて……」

「うん……？」

バイオレットは舞い続ける。

「……でも……塚松君が来ててくれてからは……少し、安心できる

よくなつて……。いつもいつも、あたしを元気付けてくれて……優しい言葉をくれて……自虐的になりそうになると、いつも止めてくれて……ちょっとずつ、頑ななあたしを、崩してくれて……

……気付いてたんだ……。

「いつか、顔をだそう……って、思つてたんですけど、会おうって言われて、嬉しかつたんです……！でも、やっぱり、ただ怖くて……。あなたは凄く綺麗な人だから……もし、本物のあたしを見たあなたが、失望した顔をしてたらって、思つたら……どうしても出来なくて……。会えなくて……」

「……」

「優しい人を、失いたくなくて……」

「でも……」

……がしゃんつ

「あ……つ……」

突然、唇を塞がれた。

触れた君は、とても温かく……

「…………いやっぱり…………あたしの」と、見て……？　あたしは、
あなたが、　好きだから…………つ…………」

董は俺の手を握った。温かい。温かい。

「小窓ごしじや、嫌なの…………！　怖かつたけど、会つて、話す方
が、ずっとといいよ…………なのに…………ねえ、どうして…………そつちばつか
り、見てないでよ…………！　あたしはここのなの。董が、あなたを好き
なの…………！」

「すみ…………」

「また壊るのは、嫌だよ…………！　ねえ、あたし、あなたのお蔭
で変われたんだよ…………？　分かる…………？　ちょっとずつだけど、ち
やんと喋れるようになつて。自分の気持ちを、言葉に出すことが出
来るようになつて…………！　こんなのと比べられるほど、塙松君の痛
みは軽い物じやないと思つけど、でもつ…………塙松君が弟さんのこと
を思つように、私もあなたに憧れるから…………そんな姿で、居て欲し
くないよ…………あたしが、助けたい…………お願い、変わつて欲しいの…
…！　崩壊を、崩してよ…………！」

田の前には、手の中には。体温があつて。

浩介じやなくて。人形じやなくて。

そこには董が居た。

最初に言葉を交わした彼女からは、想像する事も出来ないような
強い言葉を紡ぎ出す。

自分が崩壊してる時、董も崩壊してたのか。

振り絞られる強いきもち。

床に落ちている哀玩人形。

慰めてくれたのは、誰？

本当に触れて、支えてくれるのは、何？

愛しい君は……

そろそろ時間だと、浩介の声が聞こえた気がした。

「スミレってね、スイートバイオレットとブルーバイオレットがあるんだって」

「へえー？ 何が違うの？」

「……わかんない……」

「あはは、まあ、さ、そのうち分かるよ！」

「……うん……！」

スミレが咲き乱れる頃。

俺は春の病院の庭に来ていた。

でもそこは小窓がある場所じゃなくて、もつと人目につけ所。

隣には彼女が居て、ここで話している。

可愛いなあ。

ああー駄目だ俺！！ 我慢だ俺！！

冬が終わる頃から、俺達は毎週のようここで人形劇をするようになっていた。

お客様さんは入院している患者さん。

彼女はまだまだ緊張してるけど、皆に楽しんでもらえて嬉しいみたいだ。

バイオレットは、まるで生きているかのように動いてる。でも、もうあの時みたいな感情は抱かない。

あの夏の日。

彼女は俺をあの崩壊から救つてくれて、やつと現実を見させてくれた。

つめたいものに囚われていた俺に、温かい血が通つのは、会つて話せる、会つて触れられる人だと教えてくれた。

崩壊は崩れ、また始まつて……

「今日はじままでですー、皆さん、ありがとうございました……

!」

「ありがとひびきましたー」

「……あのね、スミレの話なんだけど……花言葉は知ってるの。英語の辞書に書いてあつたから……」

「ふ、英語の辞書かよ！」

「な、悪かつたですねーっ！」

「はは、『ごめんごめん』それで？ なんだつたの？」

「もー……それでね、花言葉は……スイートバイオレットが『素朴』、ブルーバイオレットが『愛』と『忠実』なんだつて」「じゃあキミはスイートバイオレットだなー 素朴だし……くく

……」

「ちよつと、笑わないでよーっ！！ 塚松君みたいに格好良い人とは違つて、ビーセ素朴ですよーでみつあみですよー。」

「みつあみは可愛いからいよ」

「！……ホント？」

「ホントホント」

変わつたなあ。

もう言葉に怯えは無く、真直ぐ俺を見つめてくる。

愛しい君は、田の前に居る、董。

「つていうか、塚松君はバイオレットが『愛』とか『忠実』とか言いたいんでしょ？」

「そうだなー、董はバイオレットみたいに忠実じやないからなー」

「ええーー？ ホントにつーー？」

「あはは、冗談だよ。でもさ、忠実じやなくともいいだろ？ 董は、変わるから」

「？ どう言つー」と？

微笑んで言つと彼女は怪訝な顔をした。

愛おしくて、また笑ってしまった。

変わらぬから。崩壊するから、俺達は生きてける。

崩壊続行。

生きてる限り、それは続く。

「董がスイートバイオレットなら、俺は虫かな。」

「虫！？ 何で！？ 虫は嫌ーーーー！」

「おいおい……そんなに嫌がんなよー……甘い方に、虫は行くだ
ひ？」

あたたかい春。

哀しさはきっと消えないけれど、

君が居るから、俺はもう大丈夫だよ。

キリは、愛する事を願ってくれる？

哀玩人形はだんだん崩れて、愛願人形になつてゆく。

誰もが崩し崩され、今日も世界は変わつてく。
君の世界をもっと素敵なものに変えられるよつて、少しでもいい
から変われるといいな。

最終話 崩壊続行（後書き）

哀玩人形はこれで終わりです。
いかがでしたでしょうか？
何かを感じていただけいたら幸いです。
ここまで読んで
下さって、本当に本当に、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0956a/>

哀玩人形

2010年10月28日04時54分発行